

仏頂尊勝陀羅尼概観

佐々木 大樹

仏頂尊勝陀羅尼概観

- 一 はじめに
 - 二 「仏頂尊勝陀羅尼經」について
 - 三 「尊勝儀軌」について
 - 四 「仏頂尊勝陀羅尼」について
 - 五 結 語
- 一、はじめに

いわゆる密教經典中に説かれる真言・陀羅尼は、実に多種多様であり、しかも膨大である。真言宗で常用誦誦する真言・陀羅尼は、その全体からすればごく一部であるが、それは歴史の中で必然的に選択されてきたものといえよう。真言宗の教理に欠くべからざるもの、また時の民衆や為政者に深く信仰されたものこそが、いま我々

に伝えられた真言・陀羅尼なのである。我々が日々読誦する真言・陀羅尼には、まさしく真言宗一二〇〇年の伝統、さらには大日如来から連続と受け継がれてきた全てが凝縮されているものといえよう。

本稿では、そのような真言・陀羅尼の中でも、中央〜東アジアにおいて最も隆盛・流布したであろう「仏頂尊勝陀羅尼」（以下、尊勝陀羅尼）を取り上げたいと思う。この陀羅尼はインドで成立し、日本のみならず、チベット・ネパールや、敦煌等のシルクロード周辺地域、中国、朝鮮、ベトナム等に信仰された形跡をみるものである。そして、所訳の言語をあげれば、サンスクリット語・チベット語・漢語のみならず、ホータン語・クチャ語・ソグド語・パクパ（蒙古）語・ウイグル語・西夏語等、非常に多種にわたる。

この尊勝陀羅尼は、奈良時代にはじめて日本に請来されて以降、入唐八家等によって經典・儀軌・注釈、梵字陀羅尼が漸次將來され、特に真言宗・天台宗・禪宗において重用された。

真言宗では、平安時代以降、尊勝曼荼羅が作られ、特に皇族からの要請をうけて増益・息災・除病・滅罪・安産等を目的とした「尊勝法」や「如法尊勝法」が諸師によって修されてきた。また臨終の行儀として、罪障消滅のため、尊勝陀羅尼は読誦されることもあった。

当派においては、尊勝陀羅尼を、宝篋陀羅尼・阿弥陀陀羅尼とともに三陀羅尼の一つとして、勤行時、廻向追善・祖師法楽のために読誦している。特に十二月十一・十二日の冬報恩講中、陀羅尼会においては、根来山の遺風を伝え、夜を徹して尊勝陀羅尼を誦えるのを伝統としている（不断陀羅尼）。

筆者は、仏の三十二相の随一である「頂上肉髻相」(usūnu) を尊格化した、いわゆる仏頂尊について数年来研

仏頂尊勝陀羅尼概観

〔表1〕

⑪	⑩	⑨	⑧	⑦	⑥	⑤	④	③	②	①	
チベット訳	チベット訳	チベット訳	チベット訳	チベット訳	漢訳	漢訳	漢訳	漢訳	漢訳	漢訳	訳語
ネウカンポ・ニーマ ギャルツェン共訳	イエシエーデ等共訳 ジナミトラ・	—	—	チューキデ・ バリ共訳	法天	義浄	地婆訶羅		杜行顛	仏陀波利	訳者
一切如来の頂尊勝と名づける陀羅尼ならびに儀軌	聖一切悪趣を浄化する頂尊勝と名づける陀羅尼	一切如来の頂尊勝と名づける陀羅尼ならびに儀軌	一切如来の頂尊勝と名づける陀羅尼ならびに儀軌	一切如来の頂尊勝と名づける陀羅尼ならびに儀軌	仏説一切如来烏瑟膩沙最勝総持経	仏説仏頂尊勝陀羅尼経	最勝仏頂陀羅尼淨除業障呪経	仏頂最勝陀羅尼経	仏頂尊勝陀羅尼経	仏頂尊勝陀羅尼経	経典名
東北 No. 598	東北 No. 597	東北 No. 596	東北 No. 595	東北 No. 594	大正蔵 No. 978	大正蔵 No. 971	大正蔵 No. 970	大正蔵 No. 969	大正蔵 No. 968	大正蔵 No. 967	出典
10世紀以降	9世紀頃	10世紀以降	10世紀以降	10世紀以降	973年～1001年	710年	(695～730年の可能性も) 685年 or 687年頃	680年 or 682年頃	679年頃	683年頃	訳出年代

究を続けてきた。その研究の一環として、平成二十年度には、『仏頂尊勝陀羅尼の研究』と題する博士論文を大正大学に提出した。本稿では、その研究成果を踏まえ、我々が常用読誦する尊勝陀羅尼について、その淵源を尋ねてみたいと思う。具体的には、以下、尊勝陀羅尼および付随する経典・儀軌の関係性について論じ、現行の陀羅尼を位置付ける試論としたい。

二、仏頂尊勝陀羅尼経について

現行の尊勝陀羅尼は単体であるが、本来は、『仏頂尊勝陀羅尼経』に収められる聖言であり、経典中には陀羅尼が説かれた因縁が明かされている⁽¹⁾。諸種の大蔵経に収録されている『仏頂尊勝陀羅尼経』を挙げると、漢訳・チベット訳として、前頁のごとく十一種が現存している。また表中に示した以外にも、インドやネパールで蒐集されたサンスクリット写本も現存しているが、そのほとんどは後世書写されたものと推測される⁽²⁾。

以上のように『仏頂尊勝陀羅尼経』の種類は数多く、しかも内容もバラエティに富むものだが、大別をすると二つのタイプに整理することが可能である。すなわち《仏↓善住天子》タイプと《無量寿如来↓観自在菩薩》タイプである。このうち日本の尊勝陀羅尼信仰と密接に関わってくるのは、前者のみであるが、ここでは両方のタイプを概観していくこととしたい。

● 《仏↓善住天子》タイプ

…………… 經典①②③④⑤⑩(⑪)

三十三天の善住天子は、ある夜、天から「あなたは七日後に死に、その後悪趣に生まれ苦しむ」との不思議な声を聞く。この声に恐れおののいた善住天子は、帝釈天に相談を持ちかけ、最終的にインド・シユラーバステイーに滞在する仏を訪ねるのである。そこで仏は、善住天子を救う手立てとして、はじめて尊勝陀羅尼を説き示すのである。その後、この陀羅尼が無量無数の仏が共に説くものであることを明かし、受持の方法（土砂加持や陀羅尼幢等の儀軌）や、罪障生滅・寿命増長等の功德を明かすのである。善住天子は、仏の説示にもとづき、六日六夜修行して、寿命を増長し、死の危機を回避するのである。

● 《無量寿如来↓観自在菩薩》タイプ

…………… 經典⑥⑧(⑦⑨⑪)³

極楽世界が話の舞台。無量寿如来（阿弥陀）が、疾病等に苦しむ短命な人々のため、観自在菩薩のもとに応じて仏頂尊勝陀羅尼を説くのである。その後、仏塔に陀羅尼を納める儀軌、本尊仏頂尊勝母 (Jñānavijaya) の画像法・観想法、護摩法等を説き、その功德として寿命増長・往生極楽等を明かすのである。

このように尊勝陀羅尼が説かれた場所・由縁は、両タイプで全く異なるものといえよう。⁴ 表に示した「訳出年代」から、それぞれの原本の成立年代を推定すると、《仏↓善住天子》タイプは七世紀、《無

量寿↓観自在》タイプは十世紀までを、その成立の最下限と考えることができる。

では、なぜ同じ陀羅尼を主題にしながらも、三百年の間に『仏頂尊勝陀羅尼經』は大きく変化していったのであるうか。私案をめぐらせれば、以下三つの要因が想定される。

〔要因1〕尊勝陀羅尼単体での流行

『法華經』『金光明經』『理趣經』等とは異なり、いわゆる陀羅尼經典では、陀羅尼の誦誦および功德を高らかに宣揚する。そのために陀羅尼は、經典を離れ、単行流通する傾向が強いが、尊勝陀羅尼もその例に漏れるものではない。一度、因縁譚と切り離された陀羅尼は、新しい因縁譚と結び付くことが容易であり、後世の信仰を反映して、無量寿に関わる経説が付されたものと考えられる。

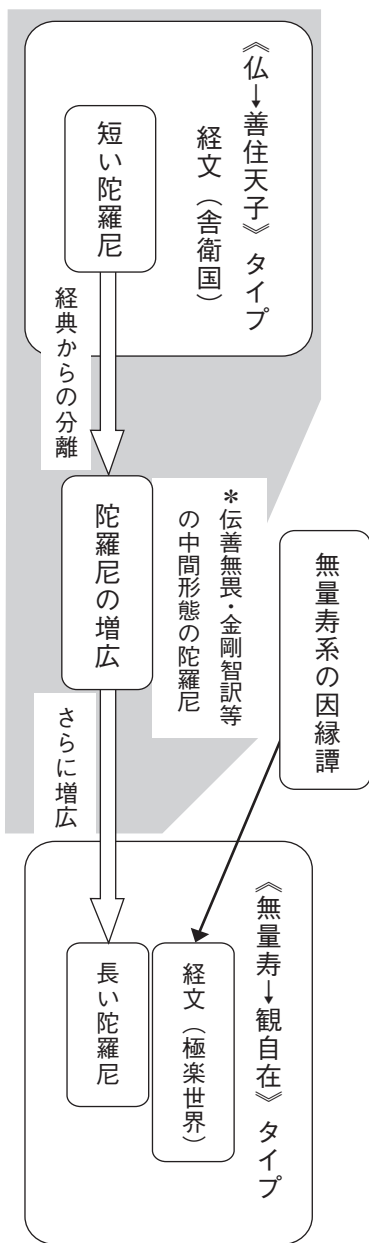
〔要因2〕《仏↓善住天子》經典に潜在する無量寿の要素

《仏↓善住天子》の經典において、陀羅尼の功德として「往生極樂世界」、「増益壽命」を挙げており、すでに無量寿へと展開する要因を内包していたものといえる。また尊勝陀羅尼自体にも、壽命に係する文言が見られ、尊勝の心真言でも共通して「アムリタ」(amrita・甘露・不死)の語が見出される。⁽⁵⁾

〔要因3〕無量寿信仰の影響

《無量寿↓観自在》タイプの経説の内容をみるならば、そこには無量寿(阿弥陀)に対する信仰の跡を認めることができる。それは、經典の舞台を「極樂世界」と定め、教主を「無量寿」とし、陀羅尼の功德として長寿延命・往生極樂を説くことから明らかであろう。しかし、当時のインド周辺における無量寿信仰の実態は詳らかではなく、ここではその影響の可能性を指摘するにとどめたい。

以上の三点の要因によって、尊勝陀羅尼と無量寿は密接に結び付き、《無量寿↓觀自在》タイプの經典に移行したものと考えられる。



上には両タイプの經典および陀羅尼の大よその関係を示したが、日本の尊勝陀羅尼信仰と深く関わるのは、網掛した部分 ■ である。《無量寿↓觀自在》の經典は、チベットやネパールで広く信仰されたものの、中国・朝鮮・日本等の東アジアでは、それほど流布しなかったようである。

三、「尊勝儀軌」について

「経典」とは、仏が説かれた教えであり、密教経典もこの形式に則っている。しかし、いわゆる顕教経典とは異なり、密教経典には、仏の聖句としての真言・陀羅尼、また印契や観想法・壇法（護摩）・画像法等が併せて説かれている。それは秘儀であり、本来、口伝面授によって伝えられていく性格のものであって、密教経典中の儀礼記事は簡略なものが多い。

そこで、実際の修法に際し、後世、様々な経説と、師からの口承をあわせ、整理・編纂したものを特に「儀軌」と総称⁽⁶⁾している。修行者は「儀軌」によって、儀礼の事前準備から、執行順序・所作等にいたるまで、その詳細を知ることができるのである。

しかし、実際には「密教経典」と「儀軌」を厳密に線引きすることは難⁽⁷⁾しく、ここでは、五成就文をとまわず、後世編纂された儀礼書を特に『尊勝儀軌』と総称したい。筆者が『尊勝儀軌』に区分するものとして、以下の漢訳四種、サンスクリット本三種、チベット訳三種がある。（*チベット訳三種は、サンスクリット本三種と全く対応している）

〔表2〕

⑩	⑨	⑧	⑦	⑥	⑤	④	③	②	①
チベット語	チベット語	チベット語	サンスクリット語	サンスクリット語	サンスクリット語	漢語	漢語	漢語	漢語
ダクパギヤルツェン訳	ダクパギヤルツェン訳	ダクパギヤルツェン訳	アバヤーカラグプタ編	アバヤーカラグプタ編	アバヤーカラグプタ編	——	若那	善無畏	不空
仏頂尊勝成就法(⑦と対応)	聖なる仏頂尊勝成就法(⑥と対応)	仏頂尊勝成就法(⑤と対応)	仏頂尊勝成就法	聖なる仏頂尊勝成就法	仏頂尊勝成就法	仏頂尊勝陀羅尼真言	仏頂尊勝陀羅尼別法	尊勝仏頂修瑜伽軌儀	仏頂尊勝陀羅尼念誦儀軌法
Toh. No. 3602	Toh. No. 3601	Toh. No. 3580	SMB. No. 212	SMB. No. 211	SMB. No. 191	大正蔵 No. 974 E	大正蔵 No. 974 F	大正蔵 No. 973	大正蔵 No. 972
12世紀中以降	12世紀中以降	12世紀中以降	12世紀中頃	12世紀中頃	12世紀中頃	不明	不明	8世紀頃	764年
									編集年代

*表中のSMBとは、バッダチャルヤ編『サーダナマラー』を指す

このうち『尊勝儀軌』もまた、①～④と⑤～⑩の二つに大別することができる。前者は、中国で編纂されたものであり、主に《仏↓善住天子》の經典に基づいたもので、日本の尊勝陀羅尼信仰に様々な影響を与えた。そして、後者は《無量寿↓観自在》の經典と対応するものであり、インド・チベット・ネパール等で流布したものと考えられる。

● ①②③④の系統

これらの儀軌の中では、さらに①と②③④に分けることができる。

まず①は、不空（七〇五―七七四）が、胎藏法および蘇悉地法を基調として編纂した尊勝儀軌である。この儀軌には、下図のごとき一種の「尊勝曼荼羅」が説かれるが、これは同じく不空訳の『八大菩薩曼荼羅經』（大正藏No.一一六七）より援用したものと考えられる。当儀軌は、毘盧遮那（胎藏）を中心とした曼荼羅・行法の中に、尊勝陀羅尼および像を組み込んだものであつて、必ずしも尊勝系の色合いが濃いものとはいえない。

次に②③④であるが、これらは共通する記事を含むことから、同一の原本に基づき派生した儀軌と考えられる。敦煌から発見された断簡『仏頂尊勝洗骨變勝靈驗別行法』一卷も同系統の儀軌に区分される⁽⁸⁾。これらに共通する記事「画像法」「壇法」「別行法」こそが尊勝系本来の要素であり、後世、他系統の要素で肉付けされて、尊勝儀軌の別が生じたものと思われる。③は原初的な尊勝儀軌の面影を伝えるのに対して、②は他系統の要素によって最も増広・潤色された儀軌といえよう。

以上の儀軌の中でも、日本で最も重用されたのは②伝善無畏撰⁽⁹⁾『尊勝仏頂修瑜伽法軌儀』全二巻であり、「尊勝法」および「如法尊勝法」の本軌として、心覚（一一一七―一一八〇）撰『別尊雜記』や、東密事相の集大成



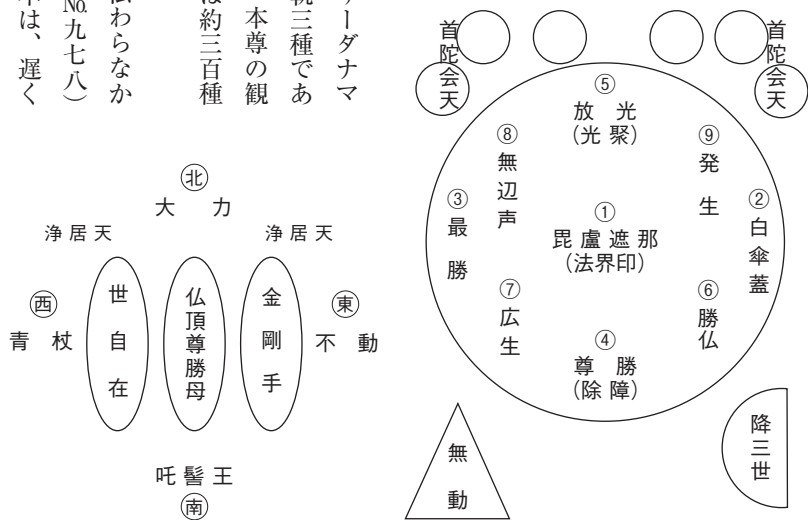
ともいえる覚禪（一一四三～一二一三）撰『覚禪鈔』において盛んに引用されている。空海（七七四～八三五）の実弟にして、十大弟子の一人とされる真雅（八〇一～八七九）が、嘉祥二年（八四九）に尊勝法を修して、清和天皇（八五〇～八八〇）が誕生したことは有名な話である¹⁰。

②に説かれる「尊勝曼荼羅」は下図のごとく、毘盧遮那を中尊としたものであり、①と同様、中期密教的行法中に尊勝系の要素を組み込んだものといえよう。

● ⑤⑥⑦⑧⑨⑩の系統

これらは、アバヤーカーグプタ（一〇八四～一一三〇）編『サーダナマラー』(Sādhana-mālā: 成就法鬘) に収録される尊勝系の儀軌三種である。『サーダナマラー』とは、金剛頂系の儀礼を基調として、本尊の観想から合一にいたる一連のプロセスを説くものであり、同書には約三百種以上の成就法が収められている。

この類の尊勝儀軌は、『サーダナマラー』として、中国に伝わらなかったが、法天訳『仏説一切如来烏瑟膩沙最勝総持経』(大正蔵No.九七八)中に同様の記事を見ることができ¹¹る。このことから当儀軌の原本は、遅く



とも十世紀を成立の最下限とすることができる。

その内容は、瑜伽者が月輪中央に「ポロン字」(Suhṛim)を觀想し、変じて陀羅尼の女神「仏頂尊勝母」(Uṣṣiṣā-vijaya)を生起させ供養するものである。この女神は、三面・三眼・八臂であり、若々しい女性と規定されている。そして前頁の図のごとく、女神を中心として右に觀自在、左に金剛手、さらには四方に不動・吒髻王・青杖・大力を配するのである。

日本では、根来寺大伝法堂等に尊勝仏頂が安置されるが、そのすがたは男性であり、当儀軌の影響は皆無といえよう。

四、仏頂尊勝陀羅尼について

以上、関連する經典・儀軌について論じてきたが、いよいよ尊勝陀羅尼を取り上げたい。前の『仏頂尊勝陀羅尼經』の項で述べたように、尊勝陀羅尼は、七〜八世紀頃より經典から離れ、単体で流布していったものと考えられる。そして、広くアジアに伝播する中で、尊勝陀羅尼は様々に改変され、時に語句が追加され増広されていったものと考えられる。諸種の大藏經に収録される陀羅尼のみを挙げても、以下のごとく非常に多く、そこには様々な差異⁽¹⁵⁾が見出される。

拙論⁽¹⁶⁾「尊勝陀羅尼分類考」では、大藏經に収録される尊勝陀羅尼二十九種を比較し、その結果、陀羅尼について、大きくは甲類・乙類の二種類、細かくは五種類ほどに分類することができた。膨大ではあるが、筆者の推定に基づき年代順に並べた表を掲げたいと思う。(＊一つの文献に複数の異なる陀羅尼が説かれるものは、それぞれ別出した)

仏頂尊勝陀羅尼概観

[表3]

●『大正藏經』所収の尊勝陀羅尼

12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	
善 無 畏	武 徹	不 空	— 崇	法 崇	不 空	地 婆 訶 羅	義 淨	仏 陀 波 利	仏 陀 波 利	地 婆 訶 羅	杜 行 顛	訳 撰 者
尊勝仏頂修瑜伽法軌儀 (梵字・豊山大学本)	加句靈験仏頂尊勝陀羅尼記 (伝金剛智・加句靈験本)	仏頂尊勝陀羅尼注義	仏頂尊勝陀羅尼真言	仏頂尊勝陀羅尼經教跡義記	仏頂尊勝陀羅尼念誦儀軌法	最勝仏頂陀羅尼淨除業障呪經	仏説仏頂尊勝陀羅尼經	仏頂尊勝陀羅尼經(明本)	仏頂尊勝陀羅尼經(宋本)	仏頂最勝陀羅尼經	仏頂尊勝陀羅尼經	題 目
大正 No. 973	大正 No. 974 C	大正 No. 974 D	大正 No. 974 E	大正 No. 1803	大正 No. 972	大正 No. 970	大正 No. 971	大正 No. 967	大正 No. 967	大正 No. 969	大正 No. 968	出 典
735 ～ 807年 編纂	823 ～ 年撰述か	774 ～ 839年 撰述か	編纂年次不詳	764 ～ 年頃撰述	764年編纂	695 ～ 730年 漢訳	710年漢訳	683年漢訳	683年漢訳	680年 or 682年漢訳	679年漢訳	訳出・撰述年代
第 二 種			第 一 種									分 類
			甲 類									

24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	
指 空	— —	— —	法 天	法 天	— —	— —	武 徹	善 無 畏	善 無 畏	仏 陀 波 利	善 無 畏	訳撰者
于瑟泥沙毘左野陀囉尼	瑜伽集要焰口施食儀 (漢字)	瑜伽集要焰口施食儀 (梵字)	仏説一切如来烏瑟膩沙最勝総持經	最勝仏頂陀羅尼經	仏頂尊勝陀羅尼 (漢字)	仏頂尊勝陀羅尼 (梵字)	加句靈驗仏頂尊勝陀羅尼記 (伝善無畏・加字具足本)	尊勝仏頂修瑜伽法軌儀 (漢字・仁和寺藏本)	尊勝仏頂修瑜伽法軌儀 (梵字・靈雲寺藏本)	仏頂尊勝陀羅尼經 (高麗本)	尊勝仏頂修瑜伽法軌儀 (漢字・豊山大学本)	題 目
大正 No. 979	大正 No. 1320	大正 No. 1320	大正 No. 978	大正 No. 974 A	大正 No. 974 B	大正 No. 974 B	大正 No. 974 C	大正 No. 973	大正 No. 973	大正 No. 967	大正 No. 973	出 典
1363 年漢訳	1271 ～ 1368 年編纂	1271 ～ 1368 年編纂	973 ～ 1001 年漢訳	973 ～ 1001 年漢訳	(806) ～ 1191 年	(806) ～ 1191 年	823 ～ 年撰述か	735 ～ 807 年編纂	735 ～ 807 年編纂	683 年漢訳 (後世増広)	735 ～ 807 年編纂	訳出・撰述年代
第二種		第一種		第三種						第二種		分 類
乙 類		類		甲 類						類		

●『西藏藏経』所収の尊勝陀羅尼

	25	26	27	28	29
訳者	チユーキデ・バリ 共訳	—	—	ジナミトラ・イエ シエーデ等共訳	ネウカンポ・ニーマ ギヤルツェン共訳
題目	一切如来の頂尊勝と名づける 陀羅尼ならびに儀軌	一切如来の頂尊勝と名づける 陀羅尼ならびに儀軌	一切如来の頂尊勝と名づける 陀羅尼ならびに儀軌	聖一切悪趣を浄化する頂尊勝 と名づける陀羅尼	一切如来の頂尊勝と名づける 陀羅尼ならびに儀軌
出典	東北 No. 594	東北 No. 595	東北 No. 596	東北 No. 597	東北 No. 598
訳出年代	10世紀以降	10世紀以降	10世紀以降	9世紀頃	10世紀以降
分類	第二種				
	乙類				

甲類の陀羅尼でも第一種(初期)のものは《仏↓善住天子》の經典に基づき、乙類はほぼ《無量寿↓観自在》⁽¹⁷⁾に対応しているといえよう。

それでは、尊勝陀羅尼がいかに増広されたのか、そのプロセスを示すために、以下三本の陀羅尼を引用したい

と思う。

① 甲類第一種『仏頂尊勝陀羅尼經』 (大正藏No.九六七・仏陀波利訳・宋本漢訳陀羅尼)⁽¹⁸⁾ 七世紀末漢訳

② 甲類第三種『智山勤行法則』 (真言宗智山派現行本・梵字陀羅尼)

③ 乙類第二種『瑜伽集要焰口施食儀』 (大正藏No.一三二〇・訳者不詳・梵字陀羅尼)⁽¹⁹⁾

元代 (一二七一) - (一三六八) 漢訳

* 漢訳音写の陀羅尼は、推定されるサンسكريット原語をあて、また梵字悉曇で記された陀羅尼は、誤りの有無に関わらず、原本に忠実にローマナイズした。

① 仏陀波利訳『仏頂尊勝陀羅尼經』所収陀羅尼

namo bhagavate trailokya-pratīviśiḥaya buddhāya bhagavate tadyathā om viśodhaya samasamantāvabhāsa-
 spharaṇa-gati-gāhāna-svabhāva-śuddhe abhiśīcatu sugata- vacana- amṛtābhiḥke āhara āhara āyu-saṃdharāṇi
 śodhaya śodhaya gāgana- viśuddhe uṣṇīṣa- vijaya-śuddhe sahasra-rāśmi- saṃcodite sarva-
 taḥgātādhiśhānādhiḥite mudre vajra-kāya-saṃharana-śuddhe sarvāvaraṇa-bhaya- viśuddhe pratīvartaya-
 āyu-śuddhe samayādhiḥite maṇi maṇi tathatā-bhūta-koṭi-pariśuddhe viśphūta-buddhi-śuddhe jāva jāva vijāva
 vijāva smara smara buddhādhiḥita-śuddhe vajri vajra-garbhe vajraṇ bhavatu mama 受持者於
此自稱名 sarva-satvānām ca
 kāya- viśuddhe sarva-gati-pariśuddhe sarva-taḥgāta-samās-vādhiḥite buddhya buddhya bodhaya bodhaya
 samanta-pariśuddhe sarva-taḥgātādhiśhānādhiḥite svāhā.

② 『智山勤行法則』所収陀羅尼

* ①に無い語句を「」で示した(相違箇所含む)。また現行智山読も傍りに付した。

namo bhagavate trailokya-prativīṣiṣṭaya buddhaya bhagavate tadyathā om viśodhaya [viśodhaya
 namo bhagavate trailokya-prativīṣiṣṭaya buddhaya bhagavate tadyathā om viśodhaya [viśodhaya
 samasamasamantāvabhāsa] -sphaṛaṇa-gaṭi -gahana-svabhāva-[viśuddhe] abhiṣmcatu [mam] sugata- [vara] -
 vacana-amrītābhīṣaṅke [maha-vantra-pada] āhara āhara āyu-samdharaṇi śodhaya śodhaya gāgana-
 uṣṇīṣa-vijaya-[viśuddhe] sahasra-rāśmi-samcūṭite sarva-tathāgatavarūkani śat-pāramitā-paripūraṇi
 sarva-tathāgatā [hrdayādhiśānādhiṣṭita-mahā]-mudre vajra-kāya-saṃhātana-[viśuddhe] sarvāvaraṇa-bhaya-
 [durgati-parivīśuddhe] pratīnavarttaya-āyuh-śuddhe samayādhiṣṭite maṇi maṇi [mahā-maṇi]
 tathāta-bhūta-koiṭi-parīśuddhe viśphuṭa-buddhi-śuddhe jaya jaya vijaya vijaya smara smara [sarva]
 -buddhādhiṣṭita-śuddhe vajri vajra-garbbe vajraṃ bhavatu mama 稱行啓名
隨事求請(呪) [śariraṃ] sarva-satvāna ca kāya-
 [parivīśuddhe] sarva-gaṭi parīśuddhe [sarva-tathāgatāś ca me samaśvasayanto]
 sarva-tathāgata-samaśvasādhiṣṭite buddhya buddhya [vibuddhya vibuddhya] bodhaya bodhaya [vibodhaya]
 [vibodhaya] samanta-parīśuddhe sarva-tathāgatāhrdayādhiśānādhiṣṭi-[mahā-mudre] svāhā。

③ 訳者不詳 『瑜伽集要焰口施食儀』所収陀羅尼

* ①のみに無い語句を「」②に共通して無い語句を「斜体」で示した(相違箇所含む)。
 また③で欠落している語句については、*****を挿入して示した。

[om bhūṃ svāhā om] namo bhagavate [sarva-]trailokya-prativīṣiṣṭaya buddhaya [te namaḥ] tadyathā om
 [bhūṃ bhūṃ bhūṃ śodhaya śodhaya] viśodhaya [viśodhaya • asama-]samantāvabhāsa-sphaṛaṇā gaṭi-gahana-

svābhāva-visuddhe abhiścīcato maṃ [sarva-tathāgatā sugata-vara-vacanamrabhiścikai] mahā-vantra-[vantra-
padhī] āhara āhara [mamā]yu-sanvāraṇi śodhaya śodhaya [viśodhaya viśodhaya] gagana-[sabhava]-viśodhe
 uṣṇasa-vijaya-[pari]śodhe sahasra-raśmi-samsudite [sarva-tathāgatāvarūkana-saḥ-parāmitā-paripūrāni sarva-
 tathāgatā mate taca-bhūmi-pratiṣṭite] sarva-tathāgatā [hrīṇaya] dhiṣṭānādhiṣṭāta-[matre matre maha-matre
 vajre vajre mahā-vajre] vajra-kāya-saṃhātana-[pari]śuddhe sarva-[karma]-varana-[vi]śuddhe pratīvarttaya-
 [mama]yī-[vi]śuddhe [sarva-tathāgatā] samay[ādhiṣṭina]dhiṣṭite [om] maṃ maṃ mahā-maṃ [vināni vināni
 mahāvīnāni matī matī mahā-matī mamatī samatī] tathātā-bhūta-kodhi-pariśuddhe viśphāta-buddhi-śuddhe [he
 he] jaya jaya vijaya vijaya smara smara [śvara śvara śvaraya śvaraya sarva]-buddh[ādhiṣṭāna] dhiṣṭita-śūre
 [śuddhā śuddhā buddhe buddhe vajre vajre mahā-vajre sa-vajre vajre garvī jaya-garvī vijaya-garvī vajra sala-
 garvī vajrotvavī vajra-saṃvavī] vajrī vajraṇi vajrāṃ bhāvatu mama [cariraṃ] sarva-satvānāṃ ca kāya-[pari]
 śati [pavata-satvā me sarvata] sarva-gati-pariśuddhe[ś ca] sarva-[tathāgatāc ca maṃ samasvasa-ganta]
 ***** [buddhe buddhe siddhe siddhe] bodhaya bodhaya [vibodhaya vibodhaya] buddhya buddhya
 [vibuddhya vibuddhya] [śuddhaya śuddhaya viśuddhaya viśuddhaya sarvata buddhya buddhyaya sarvata
 raśmi]-pariśuddhe sarva-tathāgatā [hrīdayā]-dhiṣṭānadhiṣṭite [mantra-mantrē] mahā-
 [mantrē mahā-mantra-vantra-padaī] svāhā

- 以上三種の陀羅尼を一見してわかるように、尊勝陀羅尼は後世になるにしたがい、増広されていったのである。
 ①の陀羅尼を基準にして考えるならば、②では三割ほどが増広され、③ではほぼ倍増となっている。『加句靈驗

『仏頂尊勝陀羅尼記』では、より広本を靈驗本と考える人々のすがたが記されるが、このような民衆心理を背景に、尊勝陀羅尼が増広されていったものと推測される。

当派で常用読誦する尊勝陀羅尼（現行本）は、増広の度合いでいうならば、中期に位置するものである。現行本は、善無畏（六三七〜七三五）訳本所収の梵字陀羅尼を引いた可能性が高いが、内容的には、他にも八百年代に流布したと考えられる金剛智訳（六七一〜七四一）⁽²⁾や仏陀波利訳とも一致するのである。

〔現行本の尊勝陀羅尼と一致するもの〕

- 仏陀波利訳『仏頂尊勝陀羅尼經』（大正蔵No.九六七・三本のうちの高麗本）
- 善無畏撰『尊勝仏頂修瑜伽法軌儀』（大正蔵No.九七三・四本のうちの仁和寺本・靈雲寺本）
- 武徹述『加句靈驗仏頂尊勝陀羅尼記』（大正蔵No.九七四C・二本のうちの伝善無畏將來本）
- 不詳『仏頂尊勝陀羅尼』（大正蔵No.九七四B・梵字本および伝金剛智訳本）

以上の典籍に収録される、仏陀波利・善無畏・金剛智訳として伝承される陀羅尼は、筆者の調べでは、増広の度合い、音写に使われた漢字の面で、同一の傾向を示すものである。すなわち、ある時期、同一の陀羅尼に対し、種々の著名な翻訳家に仮託して、巷間に流通したものと考えられるのである。⁽²⁾この仮託を裏付ける根拠として以下の三点を指摘することができる。

- (1) 仏陀波利・善無畏・金剛智訳とされる陀羅尼はほぼ同一の内容である
- (2) 中国の經典目録等に、善無畏・金剛智が尊勝陀羅尼を翻訳したという記録はない

(3) 前時代の仏陀波利・善無畏・金剛智訳本のほうが、後の不空訳本よりも断然増広された内容である

ならば、この現行の尊勝陀羅尼とは、いかなるものであろうか。

仏陀波利・杜行顛・地婆訶羅・義浄・不空が、尊勝陀羅尼を翻訳したことは、中国の經典目録を見るかぎり信用に足るものと考えられる。これらの典籍に収録される陀羅尼は、いずれも甲類初期に属するものであるが、その音写漢字は訳者によって相違している。

筆者が諸訳を比較したところ、善無畏・金剛智等訳とされる陀羅尼の音写漢字は、不空訳本に類似するとの結果にたどり着いた。不空訳の尊勝陀羅尼にも、二種の系統が存在するが、その中でも法崇撰『仏頂尊勝陀羅尼經教跡義記』(大正蔵No一八〇三)に収録されている陀羅尼と酷似しているのである。²⁴

以上を勘案するならば、いま我々が常用読誦している尊勝陀羅尼とは、後世、より増広された梵本によって加筆された不空訳本と考えるのが妥当であろう。

五 結 語

以上、尊勝陀羅尼の淵源を尋ねる試論を展開してきた。最初に「仏頂尊勝陀羅尼經」および「尊勝儀軌」の概要を述べて、尊勝陀羅尼の位置を示し、次いで尊勝陀羅尼自体の変遷を整理することによって、いわゆる現行本の位置付けを明らかにした。すなわち、筆者の検証によれば、我々が日常読誦する尊勝陀羅尼は、善無畏等の名で伝承されたものであり、その実態は不空訳の加筆本であることを指摘したのである。

当初、インド・チベット、中国・敦煌、さらには日本における尊勝陀羅尼の受容と信仰についても論じること

を予定したが、時間と紙数の関係上、叶わなかった。

特に日本では、真雅が初めて尊勝法を修法して以来、『別尊雜記』『覚禪鈔』等を見てわかるように、様々な僧侶によって尊勝陀羅尼および尊勝法は重用されてきたのである。新義の祖である覚饒（一〇九五～一一四三）も、尊勝陀羅尼を非常に重視して、根来に尊勝仏頂を造立し、また自身の臨終に際して七日間、また二十一日間にわたり当陀羅尼を誦したことが記録されている。そして、この覺饒の信仰に由来して、今日我々は冬報恩講の陀羅尼会で、尊勝陀羅尼を誦し続けるものと考えられるのである。これらの問題については、十分な検証の後、稿を改めて論じることとしたい。

註

(1) 最初に經典があったのか、それとも陀羅尼が先行してあり、經説が後に付加されたのか、その問題については、全く定かではない。『般若心經』等のごとく、先驅の真言・陀羅尼を想定するのが妥当とも思われるが、經典に先立つ古形の尊勝陀羅尼は、いまだ発見されていない。

(2) 筆者が検し得た中では、東京大学に「仏頂尊勝陀羅尼」(Ujnsa-vijaya-dharani) 十一本、「一切如来頂尊勝陀羅尼」(Sarva-tathagatosisa-vijaya-dharani) 三本が所蔵されている。拙論「仏頂尊勝陀羅尼の研究」中に、そのローマナイズ及び和訳を載せたが、内容的には簡略な《無量寿↓觀自在》タイプにあたる。

またMOA MUSEUMには、サンسكريットの古体で書かれた、『仏↓善住天子』タイプの写本（断簡）が所蔵されて

いる。

(3) ⑦⑨⑩は、いずれも《無量寿↓觀自在》タイプからの派生系であり、陀羅尼以後の内容が独特である。⑦は、『仏↓善住天子』と《無量寿↓觀自在》の両方の内容が混在しており、後世編集されたものと推測される。⑨は、陀羅尼以降の儀軌がきわめて簡略であり、『無量寿↓觀自在』から抄訳されたものと考えられる。⑩は、陀羅尼以後の内容が異質であり、八輻輪（八仏頂）・十六空（十六仏頂）等よりなる一種の「尊勝曼荼羅」を説いている。

(4) 両タイプの共通項を探るならば、「尊勝陀羅尼」を説く点、その功德として長寿延命を強調する点は一致している。さらに仔細に読み解けば、『無量寿↓觀自在』では、たびたび「…地獄の声を聞かず」との言い回しが出てくるが、それは『仏↓善住天子』において、善住天子が聞いた不思議な声を

指すものとも考えられる。両タイプの連関は希薄であるが、《仏↓善住天子》をある程度下敷きにして、《無量寿↓観自在》の經典が成立したと考えるのが妥当であろう。

(5) 尊勝陀羅尼中の「壽命」に関わるものとして二つの文言が見られる。

「ayuh-sandharani」[アユサンタラニ…壽命を任持するものよ]
「ayuh-sudhe」[アヨクシユデイ…壽命を淨めるものよ]

また、漢訳経軌の中には、尊勝陀羅尼の後に「仏頂尊勝大心真言」「尊勝小心真言」や「尊勝陀羅尼心真言」を説くものもあるが、そこでは阿弥陀と深く関わる「amita」の言が見える。

○仏頂尊勝大心真言「Om amita-prabhe viprala-garbbe prabodhi same siddhe maha-garbbe turu turu svaha」

〔大正藏經〕第三九卷一〇三二頁c段：法崇「仏頂尊勝陀羅尼經教跡義記」

○尊勝小心真言 「Om amita-tejavari svaha」(同上)

○尊勝陀羅尼心真言「Om amita · udhava svaha」『大正藏經』第一九卷三八九頁b段：「仏頂尊勝陀羅尼真言」

以上によって、尊勝陀羅尼と無量寿を関係づける考えは、八世紀頃すでに中国に伝承された可能性が考えられる。

(6) 一般的に同様の趣旨であっても、中国以前に編纂されたものを「儀軌」、日本で編纂されたものを「次第」と呼び、後者の方がより実習上、詳細な内容である。しかし、近年、

中国においても「次第」と近似する内容のものが発見されており、その用語の使い分けは難しいといえよう。

(7) 漢訳では単に「仏頂尊勝陀羅尼經」であっても、対応するチベット訳では、「經」(sgra)に該当する言葉はなく、「一切如来の頂尊勝と名づける陀羅尼ならびに儀軌」となっている。

(8) 『俄藏敦煌文獻』(ソ連科学アカデミー東洋学研究所サンクトペテルブルク支所) 第四卷一九四頁

途中に継目があり、それ以前は実又難陀訳「地藏菩薩本願經」(大正藏No四二二)、そして継目以降にはいわゆる「別行法」の一部が見出される。そのうち別行法の三十五法「洗骨變勝骨靈驗別行法」は、他の文獻にはないものであり、貴重なものといえよう。

(9) ここでは「善無畏撰」としたが、拙論『漢訳尊勝儀軌の研究』―特に「尊勝仏頂修瑜伽法軌儀」を中心として―(『大正大学総合佛敎研究所年報』三二一―三二二頁)で論じたように、実際には善無畏の学風を継ぐであろう、喜無畏による撰述と考えられる。

(10) 文徳天皇(八二七―八五八)と娘藤原明子(八二九―九〇〇…染殿后)の間に子供が産まれないことを案じた藤原良房(八〇四―八七二)が祈禱を依頼し、真雅が嘉祥寺西院(後の貞願寺)で修法したとされる。この記事は、最も信頼できる資料とされる寛平五年(八九三)撰「故僧正

- 法印大和尚位真雅伝記』(『弘法大師伝全集』十)等に収録されるが、修法の内容は明確に示されていない。その修法を「尊勝法」とする資料について、私見の及ぶ範囲では「別尊雜記」「尊勝」の記事が最古と思われる(『大正藏經(圖像)』第三卷一一八頁a段)。
- (11) 両文献の記事はほぼ同様であるが、『サータナマラー』は観想法・冥想法であるのに対して、『仏説一切如來烏瑟膩沙最勝總持經』は画像法となっており相違する。
- (12) SKSARASWATI 『TANTRIANA ART』で、仏頂尊勝母像の代表的な作例、ナーランダー(Nālandā)より出土した十一世紀の石像を見ることができ(インド博物館所蔵)。
- (13) タッキ・ラージャ(Takkīrāja音写・吒髻王)は、愛染明王と団体と見なされる。
- (14) 現在の大法堂の尊勝仏頂は、金剛薩埵とともに大日如來の脇侍として祀られているが、前身の小仏法堂では本尊であったという。また白河天皇(一〇五三―一一二九)の御願によって、醍醐三寶院勝覺(一〇五七―一一二九)が大治二年(一一二七)に建立した高野山東塔にも、不動・降三世とともに尊勝仏頂が祀られるというが筆者未見である。また古い造像の例としては、仁寿二年(八五二)に真雅が建立した貞願寺の大堂あるいは礼堂に、尊勝仏の像が祀られていた記録がある(『弘法大師伝全集』十・「故僧正法印大和尚位真雅伝記」)。
- (15) 写本も視野に入れるならば、さらにその種類は膨大となる。サンスクリットの写本としては、東京大学蔵『Uṣṇisa-vijaya-dharaṇi』(仏頂尊勝陀羅尼)・『Savyatahagatoṣṇisa-vijaya-dharaṇi』(一切如來仏頂尊勝陀羅尼)、また八世紀に書写されたと考えられる法隆寺の貝葉梵本等がある。また、中国北京の元代に築かれた関所「居庸関」には、ランチャ・チベット・パクパ・ウイグル・西夏・漢字の六体字の尊勝陀羅尼が石刻されており、また中国全土にわたって建立された「尊勝經幢」にも、多くの漢訳および梵字の陀羅尼が彫刻されている。
- また敦煌からは、筆者の数えでは百五十部超の漢訳等の写本が発見されており、その中には大藏經中に収録されない貴重なものも見受けられる。例えば、仏陀波利訳「仏頂尊勝陀羅尼神呪」・「仏頂尊勝加句靈驗陀羅尼」、不空訳「仏頂尊勝陀羅尼」・「一切如來尊勝仏頂陀羅尼」、訳者不詳「仏頂尊勝陀羅尼神呪」等である。
- (16) 『大正大学綜合佛敎研究所年報』第二九号所収(二〇〇七年)
- (17) 『仏↓善住天子』タイプに属する經典「聖一切惡趣を淨化する頂尊勝と名づける陀羅尼」(東北No五九七)のみは、例外的に乙類の陀羅尼が収録されており、後世陀羅尼が入れ替えられた可能性が考えられる。
- (18) 『大正藏經』第一九卷三五二頁a段(大正藏No九六七) 『大正藏經』には仏陀波利訳として、經文中に一本(高麗

本、経末に二本（宋本・明本）が掲載されている。このうち高麗本に基づく陀羅尼は、後世加筆されたものであり、宋本・明本の陀羅尼こそが仏陀波利訳本来のものと考えられる。

(19) 『大正藏經』第二卷四八〇頁c段

漢字音写および梵字の陀羅尼が併載されるが、多少相違しており、ここでは梵字のものを用いることとした。

(20) この箇所では、行者自身の名を称えて祈願することが記される。全く同一の文章は、『大正藏經』中に見出せないが、多くの尊勝陀羅尼で同様の趣旨が述べられている。一般的に「mana（我の）」の後に自身の名前を挿入するが、「称名、此の字に替う」（大正藏No.九七〇）として、「mana」と入れ替える異説も存在している。また、名称の挿入に関しても、「跋折藍婆跋觀麼阿目羯寫」として、正統なサンスクリットではないが、「mana（我の）」と格を合わせ、「○○○+sva」との工夫が見られる資料もある。

(21) 仏陀波利訳と伝えられる陀羅尼には、大きく三種の系統があるが、ここでは②のものを指す。

① 仏陀波利自身が翻訳した甲類初期の陀羅尼：『仏頂尊勝陀羅尼經』（大正藏No.九六七）の宋本・明本

② 仏陀波利訳とされる甲類後期の陀羅尼……………『仏頂尊勝陀羅尼經』（大正藏No.九六七）の高麗本、『仏頂尊勝加句靈驗陀羅尼』（敦煌写本：Stein. No.二五六六・四三七八・

五五九八）

③ 仏陀波利訳とされるも杜行頭訳の特殊な文脈を含む陀羅尼：『仏頂尊勝陀羅尼神呪』（敦煌写本：Stein. No.四七二三）

(22) 以下の本文は、拙論「尊勝陀羅尼成立考」（『加藤精一先生古稀記念論文集 真言密教と日本文化』所収：二〇〇七年）に基づいた論説である。

(23) 不空訳とされる陀羅尼には二種の系統がある。

① 七六四年頃に不空自身が翻訳した陀羅尼
……………『仏頂尊勝陀羅尼念誦儀軌法』（大正藏No.九七二）
……………『仏頂尊勝陀羅尼經教跡義記』

……………『仏頂尊勝陀羅尼』（敦煌写本：北京函No.七三七二）

② 不空訳とされる①よりも増広された陀羅尼

……………『仏頂尊勝陀羅尼注義』（大正藏No.九七四D）
……………『一切如来尊勝仏頂陀羅尼』

(24) 法崇とは千福寺の僧で、かつて不空三藏の門に遊学したことが序文で述べられている（『大正藏經』第三九卷一〇二二頁a段）。『仏頂尊勝陀羅尼經教跡義記』は、『仏頂尊勝陀羅尼經』の注釈書であるが、経文は仏陀波利訳、陀羅尼は不空訳を引いているものと考えられる。

……………『仏頂尊勝陀羅尼、尊勝儀軌、尊勝曼荼羅（キーワード）』